



沖津信也

おきつしんや●山形県出身。
1971年教育学部卒業。中学校長を勇退後は洋画家として活躍中。日展会友、ル・サロン永久会員、日展山形会会員、緑光会会長。受賞歴も多数。

<http://www13.plala.or.jp/atelier-okitsu/>

交流の成果



山大聖火リレー

松尾芭蕉がたどった「奥の細道」の世界観を油絵点描で描き続けている洋画家の沖津信也さんは、本学教育学部(現・地域教育文化学部)の卒業生。美術教諭として勤務し、教頭、校長を歴任し、校長時代には卒業生850名以上の似顔絵を描き、「もう一枚の卒業証書」として保護者に贈った先生としても話題となった。画家を志望するほど絵が好きだった沖津さんは、教育に尽力する傍ら、創作活動にも情熱を注ぎ続けた。2000年5月、いつものように油絵制作のために訪れた酒田市の「眺海の森」でのこと。広大な庄内平野を流れる最上川、海に沈む夕日、それらの光景に『暑き日を海に入れたり 最上川』という芭蕉の句を感じて衝撃を受け、油絵で描く奥の細道の旅を決意したという。この時の作品は、2003年にフランス・パリのルーブル美術館国際展「美の革命展」でグランプリを受賞している。

その後、約14年の歳月をかけて「奥の細道」の行程を巡り、イメージーションに導かれるままに作品を描き続けた。「作品は多くの人の目に触れることによって生きてくる」との思いから、公募展への出展や個展の開催にも積極的だ。一枚の絵を通してそこに会いや感動が生まれる。それは絵の創作過程にも言えることで、現場にキャンバスを立てて絵筆を動かすと、声をかけてくれる人がいる、創作の様子を見守るギャラリーができる、そんな一期一会の交流が沖津さんの創作意欲を一層掻き立てる。人々との交流と刻々と変化する現場の光や空気感を大切にしたい、と創作の現場主義を貫いている。

沖津さん一家は、奥様も2人のお子さんも本学出身という山大ファミリー。それだけに後輩たちへの思いも強く、学生生活を充実させる上で“交流”を大切にアドバイス。各界、各層、海外も含めたさまざまな場に身を置いてみることは非常に有意義で、ジャンルや世代を超えた化学反応も期待できる。6月には、山形市の文翔館で沖津さんの個展が開かれる。多彩な交流が生まれそうなその場に身を置いてみてはどうだろうか。



「奥の細道」の行程をたどって十余年、現場主義で描き上げた渾身の作品群。

沖津信也 洋画家



庄内平野を流れる最上川と日本海に沈む夕陽を描いた「夕照最上川」。奥の細道を描ききっかけとなった作品。2003年、カルーセル・ド・ルーブル「美の革命展」グランプリを受賞。



国宝・羽黒山五重塔の前に巨大なキャンバスを持ち込み、現場主義を貫く沖津さん。道行く人と話し、大勢のギャラリーに囲まれ絵筆を動かす醍醐味、人々との交流が励みになる。